この位置に至ると貝殻、特にナガラミ、サザエ、カキなどが現われ、またその中には鉄滓、刀剣、土器の破片等も出てきた。

1　土師器については、江沢中葉氏が説明しているので省略する。

2　フイゴの途中が二つに割れて左半分の復元できるもの。

3　鉄滓は溶解して流れ出し、木炭を取巻いているもの。

さらに四十糎ぐらいの河床から牛の頭蓋骨を発見し、その六十糎ほどのところから猿の歯、山猫の下顎、鹿の骨、鯨、魚の化石（部分）馬の下顎、石皿、クルミの実等を発見した。

石皿は復元できないがクルミをはじめ、トチ、カヤ、クリの実などを粉砕したのではないか、古代人は次第に海水が減退すると、この付近に居を移して、今までの漁猟や、狩猟から農耕生活に変っていったと思われる。

この出土品について、古生物学者高井冬二東大教授は、現場を仔細に調査した結果、東京有楽町貝層に似ている点があるといわれた。有楽町貝層というのは、青暗い灰色をした海成層であり、およそ一万年前から三千年にまたがった地層である。下部の底に近い部分から象の化石（部分）が発見され、関東地方でも縄文文化を生んだ初期の海は、有楽町貝層の堆積との関係をもった海であるといわれている。

この河床から発見された諸動物の化石を、地質上或は共通点がなかったことでもないだろう。それにしても二、三十万年前、洪積世の中頃の古東京湾とは一つの海で、鯨の遊泳した湾であったというから動物の化石が発見されるのはむしろ当然のこととともいえよう。

芥川龍之助と上総一の宮

秋場　淳

1

芥川が一の宮へ来るきっかけとなったのは、一の宮の領主加納家の近侍の士、堀内村次の孫に当る利器という人が、東京府立三中で一級上であり、共に学年委員をしていたので知り合い、更に一高へ共に進んだので親しくなった関係である。大正三年の夏（七月二十日）堀内が初めて彼を一宮に誘ったのである。彼が二十三才東大一年終了の時であった。当時彼は久米、菊地、松岡等と第三次新思潮を発刊し、五月に処女小説「老年」を発表し、文壇にデビューする時期を狙っている時でもあった。堀内家は当時母家が火災にあって、離れに一家が生活し、余裕がなかったので、堀内の知合いの渡辺という町中にある商家の奥座敷八畳の間に起居することになった。水泳の心得もある彼は、堀内と海岸によくでかけたようである。当時の一宮海岸の第一印象を三中時代から親しくしていた後輩の浅野宛に、次のように葉書で書き送っている。

「君は僕より一級上に堀内利器と云う専売特許の井戸掘器械のような名の男がいたのを知っているでしょう。一の宮はあの堀内の故郷です。堀内の故郷だけに又海も恐しく未開です。海水浴と云うのは名ばかりで実は波にぶんなぐられにはいるの

だから堪りません。海水浴場にある一の宮町役場の掲示にも泳げとは書いてないで背部を波にうたすべしとかいてあります。悪くするとひっくりかえされて水をのみます。始めての日などは可成塩からい水をのまされました。此未開な海に堀内がつかっている所は天下の奇観です。手拭を後鉢巻きにして漢語で形容すると、壮士慘不レ驕とでも云いそうな風です。それで当人は「此位きれいな海はないぜ。」と得意になっているのだから手がつけられません。」

彼が、彼流にいえば恐しく未開な海、いいかえれば、太古から生まれたままの自然の中に、しかも、波の荒い九十九里の中でも特にその度合いの強い白波に身体をもみくちゃにされている様が目に浮んでくる。又、一高の恩師菅先生宛に、

「水泳と午睡とを日課の如く致居候　一の宮の海は波高く砂荒く僅に三里を隔てたる大原さへ此処に比すれば寧ろ雅馴なる感有之候、海岸も砂丘多く所々に弘法麦と浜防風との青と点ずるも荒涼たる観をなすに止り候」とも書き、都会育ちだけにその荒涼感をしみじみと感じたらしい。

又、「風俗は他の盛り場の如く俗悪を極め居らず月三斉町にて開かるる市の如きも朴厚愛す可きもの有之候」と、彼の止宿先の前を一直線に通る、田舎町にしては巾広い通路の両側に、筵を敷き、特産の西瓜や瓜類の野菜を売る近隣の農家の人びとの純朴な姿に心をとめる彼の姿がうかがわれる。

そして、又、今一の宮町が戦時中忘れられていた花の名所「洞庭湖」を大いに観光宣伝しているが、手紙の最後にその洞庭湖に言及して、

「一の宮川の上流に近き湖沼を洞庭（註、中国湖南省の北部にある華中第一の大湖、風光の美をもって知られている）と名づけ桜樹を其上に植え樹間多賀城の古碑に擬せる石碣（いしぶみ）を立て桜樹一百五十株を天女に献ずる文を碑面に刻したる皆老侯が風流の余戯に候」。

と、城主加納家の風流な古い町一宮の一端をとらえている。

2

彼は前述のような恩師への一宮の状況と、学生らしいユーモラスな文面で親友に書いてはいるが、実はこの時、いやし難き傷心の悩みを胸に秘めていたのである。というのは、Yという女性に初恋をし、その女性がたまらなく好きになり、しかもその恋は、絶対実らないであろう、ということを予測すればする程彼の悩みは深まっていったのである。何故か、ここで

簡単に彼の生い立ちから語らねばならない。彼は、明治二十五年三月一日、東京築地入船町に生まれた。父新原敏三は山口県出身の平民で、牛乳屋を業とし、新宿と築地入船町に牧場をもっていた。母フクは江戸に十数代続いた士族芥川家の生まれで、彼はこの母が三十三才、父が四十二才のいわゆる大厄の時の子であり、江戸時代からの迷信に従い、長男でありながら捨子の形式を踏むことになった。拾い親は父の支店を預る松村氏で、形式的にせよ、彼は一応、親から捨てられたのである。しかも彼の薄倖の運命は、彼の生まれた年の十月二十五日に生母フクの突然の発狂によって最大の不幸を宿すことになった。母の発病によって、彼は母の実家芥川家に入り、実母の姉で、終世嫁さずに家にいた伯母ふきに育てられた。彼女は、彼を実子のように、幼時から抱き寝をしたほど非常に可愛がったので、伯母ふきの兄道章に子がない為、養子となって芥川家を嗣ぐようになったのである。

しかし、新しく興ろうとする平民、新原家（実家）と、旧い伝統をひそかに誇る士族、芥川家（養家）との間には、融合し難き微妙な排他的な感情が漂っていたようである。

さて、Yという彼の初恋の女性は、彼の実家新原家の知り合いの家の娘で、彼女の家も又、士族でないということが、何よりも養家のお気に召さなかった。彼女の家を彼が訪問することさえ喜ばないようになった。彼女は美しく極めて聡明な頭脳の持ち主で、彼は強く惹かされたようである。この悩みに堪えかねて、一宮に来たのである。

一宮に来ての止宿先渡辺家で、彼の食事の世話をやいていた、小林という女性（現在七十五才）が、なお今健在で当時の様子を、

「堀内に頼まれて、芥川の三度の食事の世話をすることになった。彼は堀内と、毎日海岸にでかけた。頭を丸坊主にし、家にいる時は昼寝もよくしていたが、一重がすりに袴をつけ、時々、机に向い、原稿用紙を前にして、神経質な沈んだ顔つきをしていたのが今でも目の前に浮んでくる。見ると、机の傍にやぶいて丸めた原稿用紙が一杯散らかっていた。書くというのはむずかしいものですよ、ともいっていた。口数は少なかったが、堀内の家に招かれて当地の名産西瓜を御馳走になり、非常にうまかったよ、と笑顔を見せたのが印象的だった。」

と、いう意味のことを、中風気味なよく回らない口元から語って貰った。

彼はこの机の上で、彼と一高時代の同級生であり、最も親交のあった友人（恒藤？）宛に、初めて不幸な恋愛の苦悩を、そっと打ちあけた手紙と歌を送ったのである。

（註）筑摩書房発行「日本文学アルバム芥川龍之助編」の原稿用紙にかかれた写真より採録、前文につづく歌八首も同様、この外に歌もあるが採録不能に付略す。

「わが友の前にさゝぐ。そはこのわが友のみ知るべく又知らざるべからざるわがかなしみをうたへばなり。わが心、いたく、賤しく且けがれたれど、われはわが友の、そをゆるすべく、あわれむべきを信ぜんとす。一切を忘れしむるものは、時なり。されど、その時を待つ能はざるをいかにせん。われは忘却を感能に求め、感能はわれに悲哀をあたへたり。」

と、前書きして、歌を綴っている。その歌の最初に

人妻の中の一人に　君をしも　数ふ可き日のありと知れども
美しき人妻あらむ　かくてあゝ　わが世かなしく　なりまさるらむ

と、美しき彼女への恋情と悲恋の心情を吐露している。まだ彼女は他の人の妻となったわけでもなければ、彼が求婚してことわられたわけでもない。彼が暗い宿命による養子という自意識に縛られ、余りにも弱々しい彼の神経は、養父母の反対を押し切ることもできず、その意に添わねばならないと彼女への求婚はあきらめ、一切を忘れしむるものは時なり、と書かざるを得ない彼の心境は黯然たるものであろう。正にそれを、裏書きするように、

鳥羽王の夜空の下に　ひそひそと　せぐくまりつゝ行く男あり
夜のほどろ　望みもせなく　ひそひそと　爪をかみつつ　わがゆけるはや

とも歌い、一の宮川の川辺に添う薄明りの松並木や洞庭湖のほとりを、頭をさげ無意識に爪などをかみながら、悄然とさまよい歩いている彼の姿が目に浮んでくる。

又、街に出ては、

夏の夜は　更けねとうたふ清元の　三味を求め来しわれならなくに
人泣くと　うたがひにつつ来てみたる　茶屋の二階の騒ぎ唄はも

と、この田舎の城下町に、どこからとなくあの哀調をおびた清元の三味の音が、流れて来ると彼女の住む東京が、そして彼女が急に恋しくなるに違いない。そして、又、茶屋の唄騒ぎすら傷心の彼には、泣いているようにしか聞こえて来ないに違いない。そのわびしさを酒に求め、のれんをくぐって飲屋に入れば、

唇の赤き女は　あかし眸に　われを嘲むとわらひけらずや

飲み屋の女は猶更、つきつめている孤独の彼の味方ではなかった。彼女達の意味のない笑いさえ、自分を嘲らっているようにしか思われなかった。忘却を感能に求め、感能はまさにこうして悲哀しか与えなかったのである。

すごすごと、止宿先の八畳の間に帰れば、いとも孤独な自分を発見して、

小ざかしく　巻煙草吸う唇の　うすくつめたく　ゆがみけるあわれ

生まれ出てすぐ暗い宿命を背負い、殊に生母の愛から見放され、それを、初恋の人の純愛によって、支えられ、強く生きよう、としたがその望みも叶わぬと知れば、鏡の中の冷たくゆがんだ唇に孤独な人生の哀感をしみじみと感じたであろう。かように、彼がYという初恋の人に、強く惹かれ、しかも結ばれることのできない、いてもたってもいられないような青春の苦悩を、友人にぶちまけることで少しでも自分を慰めよう、諦めよう、いずれ時が、時の流れが解決してくれるだろう。と、いとも気の弱い小児病的な彼の性格がにじみ出ている。又、一の宮に来て八日たった七月二十八日に、直接彼女への返事を左のように書いている。

（註）一九五四年筑摩書房発行の「日本文学アルバム芥川龍之介編」の原稿用紙に書かれた手紙の写真より採録した為不明の個所は○とした。

「御手紙拝見致し候
二度も三度も御返事認め候へど皆意にみたねばやめに致し候
〃赤百合〃の中によひどれの詩人出で来り候○べし　杖に女の首を刻みて〃人道〃をか○づくる○に候　これぞヴェルレーヌを描けるものに候○○る　わかき彫刻家も　その恋人も　皆まことありし人々の由に候
この地の自然の事ざはりのあらきにはおどろかれ候　松脂のにほひと砂と海とのみ　砂丘には月見草の葉さへつけず弘法麦と浜防風と　僅に青を点ずるのみに候
海には毎日　ひたり候へば橄欖の如く黒み候　一高生二人　常に共に泳ぎ候
都の夜など思出でられ　時にはかへりたくなり候　何となく心おちゐぬ事多く候
書くべき事多けれど　書き得ざるを如何にせむや　これにて御免蒙る可く候」

龍之介

これが全文であるが友人に歌と共に送った手紙とは違って何と自分を殺して淡々とした、しかも四角ばった候文で書かれ

てあることに思いを致す時、これが若冠二十三才の同一人物である芥川が書いたのかと疑わざるを得ない。「書くべきこと多けれど　書き得ざるを如何にせむや」だけでにえくりかえる恋情を押しきれるものであろうか。

思うに、彼が若し感情の趣くままに返事を書いたとしたら、芥川を愛していた彼女もそれに強く動かされて、遂に二人が親の許さない恋として、家出をせねばならない破目になることをおそれたかも知れない。家の封建的ともいうべき束縛からぬけ切れない弱さ、養子としての控え目な、わがままを通し得ない性格を多分に持っていたとしても、全くはがゆいといわざるを得ない。何という性格の弱さだろうか。

彼が八月の末、一の宮から帰って、学友恒藤宛に、

「僕は一月ばかり一の宮へ行ってゐた。毎日義務のやうに泳いだりひるねしていた。その癖ひまが少しもなかった。運動をしつづけにするのでうちにゐるときは新聞をよむのも億却な程くたびれてゐたのである。」

と、何故義務のように感じたであろうか？　恋しい彼女を忘れようと、どぶんと寄せる白波に身体をぶんなぐられて、くたくたに身体を疲れさす為にのみ海に通ったのだからまさに義務だったに違いない。ただひたすらに忘却と自虚にその日を送りながら。……。

彼を当時世話した小林の老婆も、四十六年を経た今日、なお昨日の如く芥川の傷心の姿が目の前にありありと浮んでくるに違いない。

3

この恋は何時頃芽ばえ、どうなったかということは興味深いばかりでなく、彼の文学生活に大きく影響した。彼が一の宮に来る三ヵ月位前の五月十九日に恒藤宛の手紙の中に、

「僕の心には時々恋が生れる。あてのない夢のやうな恋だ。どこかに僕の思ふ通りな人がゐるやうな気のする恋だけれども、実際的には至って安全である。何となれば。現実に之を求むべく一に女性はあまりに自惚がつよいからである。二に世間はあまりに類推を好むからである。

要するにひとりでゐるより外に仕方がないのだが時々はまったくさびしくってやり切れなくなる」

と、あるのでこの頃から、初恋の女性を意識したであろう。さびしくてやり切れない心の空腹が恋を要求し、養父母の反

対な素振りに急速に燃え上り、末は結べぬ恋とあらば、同じ東京にいるに堪えず、堀内の誘いをさいわい一の宮にやって来た訳である。感傷の露出を極度に嫌った彼としても、珍らしく感傷的な歌を書かざるを得ない心境は余程深刻だったに違いない。一切を忘れしむるものは時なり、と一の宮の止宿先で諦めようとはしたものの、明けて四年の初め頃、彼女がいざある男と婚約したと聞き、いてもたってもいられなくなって意を決し、彼女に求婚したい、と養父母にその心情を初めてうち明けたのである。

勿論、烈しい反対を受けた。学友恒藤宛の手紙（大正四年二月二十八日付）に、

「伯母が夜通しないた。僕も夜通しないた。あくる朝むづかしい顔をしながら僕が思切ると云った。それから不愉快な気まづい日が何日かつづいた。」

と、あり、それでも思い切りがつかず

「其中に僕は一度女の所へ手紙を書いた。返事は来なかった。」

どうしても彼女に一度会いたいと思い、友人砕花の寄寓していた家の娘が彼女と女学校友達だったので、そのはからいで、彼女の結婚式の前日、砕花の所で二人は最後の会見をした。その時の様子を、

「僕と二三度世間並な談話を交換した。何かの拍子で女の眼と僕の眼とがあった時、僕は女の口角の筋肉が急に不随意筋になったやうな表情を見た。女は誰よりもさきにかへった。（中略）五六日たって前の家に招かれた礼に行った。その時女がピポコンデリック（註、現代のノイローゼ）になってゐるという事をきいた。不眠病で二時間位しかねむれないと云ふのである。（中略）二週間位たって女から手紙が来た。唯幸福を祈ってゐると云ふのである。」

彼女も深く芥川を愛していたに違いない。封建的な家尊重の犠牲に、眠むれぬ夜を堪えねばならなかったであろう。

彼自身も、彼が結婚をした後にも、その初恋の彼女に会わせてほしい、と砕花に依頼した程彼女には未練を残したようである。彼は今更ながら深刻に養子である自分の不自由さに泣き、比較的可愛がってくれている養父母にさえ、イゴイズムの刃を痛感したであろう。

親友恒藤宛の手紙（三月九日）に、

「イゴイズムをはなれた愛があるかどうか。イゴイズムのある愛には、人と人との間の障壁をわたる事は出来ない。人の上に落ちてくる生存者の寂寞を癒す事は出来ない。イゴイズムのない愛がないとすれば、人の一生ほど苦しいものはない。」

といい、更に、

「周囲は醜い。自己も醜い。そしてそれを目のあたりに見て生きるのは苦しい。しかも人はそのまゝに生きる事を強ひられる。一切を神の仕業とすれば、神の仕業は悪むべき嘲弄だ。僕はイゴイズムをはなれた愛の存住を疑ふ(僕自身にも)

そして最後に神に対する復讐は、自己の生存を失ふ事だと思ふ事がある。」

と迄つきつめて考えている。彼の内にある厭世的な精神が、この失恋によっていよいよ深まっているのを痛感する。彼が熱望したエゴイズムもない愛、神の愛のような純粋な愛は否定され、静かに周囲と自己とを眺めながら、周囲に対する憤りと、又自己に対する憤りとから彼の暗い偏狭な心はいよいよとぎすまされた。そして人間の醜さ、特にイゴイズムに思いをひそめ、美名を以て呼ばれるあらゆる精神の根底にさえ、イゴイズムの刃が潜んでいるのを彼は摘出しようとした。

ここからユニークな芥川文学が生まれ出たのである。

彼は現実の醜さに謙悪して、小説の主題をなるべくユーモラスな古典の世界に取ろうとした。そこで今昔物語から材料を取って、「羅生門」を書き、「鼻」を書いた。人間の醜いイゴイズムを摘出しようとしたことはいう迄もない。この出世作の「鼻」は大正五年二月第四次新思潮創刊号に発表された。彼の師である漱石に「あゝいふものを是から二三十並べて御覧なさい。文壇で類のない作家になれます。」と、賞讃を受け、花々しく文壇にデビューしたのである。一の宮時代から始まる失恋の苦悩こそは、彼の暗い運命と相俟って不滅の芥川文学を樹立したといっても過言ではあるまい。

4

彼が「鼻」を発表してから四月に「孤独地獄」(新思潮)、五月に「父」(新思潮)、初めての依頼作品「虱」を雑誌希望に書き、「鼻」が再び鈴木三重吉の推薦により新小説に再掲載されるような花々しさだった。その大正五年五月十六日、当地京都帝大にいた堀内利器宛に次のような絵葉書(未発表のもの)を送っている。

「久米のが一番まづいと云ふのは当ってゐない。己のが一番うまいと云ふのが当ってゐる。しかし、己たちは皆まじめである。君の所へは新思潮の二号と三号だけ送ったかな、一号をまだ送らなかったら早速送るからしらせてくれ、京都の本屋では新思潮が十四冊うれたそうだ。だから君も本屋でかえるだろうと思ふ、さもなかったら吉田町字牛の宮田畑方菊地寛と云う男にさう云ってくれ」

「羅生門」を書き「鼻」を書いてからの彼の自信満々たる態度がしのばれる。葉書の裏の浮嶋沼の富士の絵のある上に、

霜つづらへなへな男ありわぶれ　いで穴ほりて生きうめにせむ

という怪異な歌が、無雑作に綴られているのに心を惹かれた。

「へなへな男」とは余りにも弱い性格の自分――殊に、堀内を思えば、当然堀内の誘いで過した一の宮の夏が思われ、所謂初恋の女性Y嬢に強く惹かれながら、その当時義父母に当然反対されることを恐れて、自分の心情をあからさまにうち明けることもできず、又彼女へすらも本当の恋文を書き得ず、やっと友人だけに悲恋の苦悩を感傷的な歌に托して書き送った自分、そして一切をすてて彼女と二人の世界に入る勇気もなく、遂に永久に行路の人となってしまった彼女にいつ迄も未練を残して、それにこだわり、何かわびしくうらぶれて、やっと生きているような「へなへな男」の自分をこの際敢然と葬ってしまいたい、雪をいただいた富士の見える浮嶋沼の霜柱の立った荒涼たるこの土地の下に、自分で穴を掘って、今一つこの弱々しい、いまいましい過去の自分を、生き埋めの刑にしてやろう。きっとそうするぞ。そして、生まれかわった強い芥川となって、新しい気持で文学に専念するぞ。「羅生門」よりも「鼻」よりも、もっと立派なものを書くぞ、堀内よ、見ていてくれ、という半ば自虐的な、そして又、文学に対する自信の程を彼流に表現した歌ではないだろうか。

さて、初恋の人、Yという女性との悲恋によって、彼の心の中に新たに芽ばえて来た第二の女性は塚本文子である。彼女は三中で彼の親友の一人であった山本喜誉司の姪に当り、彼が十六才の時(明治四十年)山本家に母と移ってきたので、彼女を知っていた。養父母はこの文子さんがお気に入りであったようである。

山本宛(五年始め頃)の手紙の中に、

「僕のうちでは時々文子さんの噂が出る。僕が貰ふと丁度いいと云ふのである。僕は全然とり合はない。何時でもいい加減な冗談にしてしまふ。始めはほんとうにとり合はないでゐられた。今はさうではない。僕は文子さんに可成の興味と愛とを持つことが出来る。」

とあり、初恋の人との破局によって、文子さんに心を引かれはじめたのが分る。

更に続いて、

「僕は時々人生を貫流し、芸術を貫流する力の前に立つ事がある。そして其力を見失った瞬間に僕は僕の周囲にある大きな暗黒と寂寥とに畏怖の念を禁ずる事が出来ない。僕が僕以外の人間の愛を欲するのはこう云ふ時である。

悠久なる時の流の上に恒河砂の一粒よりも小なる僕自身を見る。僕はかう云う時心から愛を求める。そして又かう云う時が僕には度々ある。僕はさびしい。」

と、あり、人生の寂寥感に打たれ、女性の愛なくしては過せない彼の心境によって、初恋の人から急速に文子に移っていった経過が分る。五月に山本宛の手紙には、

「今日又、文ちゃんに対する Liebe（愛）を新にした。僕が文ちゃんを愛してゐると云う事を少しでも文ちゃんに知って貰へたらと思った。

知ってゐると云ふ事が少しでも僕にわかってゐたらと思った。一つはそれでさびしかった。文ちゃんの僕に対する必もちが少しでも僕にわかっていたらと思った。たとへそれが Negative（否定的）な心もちにしても幾分か僕にわかっていたらと思った。もう一つはそれでさびしかった。」

愛の空腹に堪えず、早く彼女の愛情を知りたいと願う気持が書かれている。その後、山本宛（八月一日）の歌の中に、

えやわする君とゆく夜の自動車に　われらがつめる薔薇の花たば

ものうげにわれをながめてうちもだす　その明眸にかへむものなし

二人だけの自動車の中で薔薇の花たばに包まれて、自分を恥しそうに見つめる文子さんの可憐な美しさが目に見えるようで、彼女との恋にいとも満足な喜びを感じている。

5

文子さんとの恋の歓びを胸に抱きつつ、大正五年八月十七日に一宮に新たに気持で、久米正雄と二人で再び訪れたのである。彼が二十五才、東大英文科を二番で卒業したばかりの時である。今度は一宮海岸の広い松林の中にある一宮館に宿をとった。彼は意を決して、文子さん宛に初めて長い求婚の手紙を書いた。彼女はまだ十七才の跡見女学校の初々しい学生であった。

原稿用紙に「八月二十五日朝　一の宮町海岸一宮館にて」と前書きして、

「文ちゃん

僕は、まだこの海岸で　本を読んだり原稿を書いたりして　暮してゐます。何時頃　うちへかへるか　それはまだ　はっきりわかりません。が、うちへ帰ってからは文ちゃんにかふ云う手紙を書く機械がなくなると思いますから、奮発して一つ長いのを書きます。ひるまは仕事をしたり泳いだりしてゐるので、忘れてゐますが、夕方や夜は東京がこひしくなります。さうして、早く又あのあかりの多いにぎやかな通りを歩きたいと思います。しかし東京がこひしくなると云ふのは東京の町がこひしくなるばかりではありません。東京にゐる人もこひしくなるのです。さう云ふ時に僕は時々文ちゃんの事を思ひ出します。文ちゃんを貰ひたいと云ふ事を、僕が兄さんに話してから、何年になるでせう。（こんな事を　文ちゃんにあげる手紙に書いていいものかどうか　知りません。）」

ここで「文ちゃんを貰ひたいと云ふ事を、僕が兄さんに話してから何年になるでせう。」

とは、Y嬢に恋こがれていた当時として本心だろうかと疑問に思われる。しかも、前に記した様に、五年始め頃の友人山本喜誉司宛の手紙に、「僕のうちでは時々文子さんの噂が出る。僕が貰ふと丁度いいと云ふのである。僕は全然とり合わない。何時でもいい加減な冗談にしてしまふ」とその本心をうちあけている。この矛盾はどういうことだろうか？

考えられることはY嬢との恋愛以前に、小学校か、女学校に入りたての初々しい文子さんを見とめて、何の意味もなく軽い気持で文子さんの兄さんに話したことを思い出し、自分とY嬢とのことを文子さんが感付いているかも知れないと思い、彼女との関係を隠す為に、自分は前々からずっと文子さんが好きだったのだということを文頭に印象的に強調したのだと思われる。スタイリスト芥川の一面が忍ばれるにしても、純情青年芥川がなぜこのような本当でないこじつけた文章を書いたのだろうか。かく深く考えると、彼の暗い宿命と、殊に彼の生まれた年に、生母の発狂するという運命にあい、生母の暖い愛を知らずして育った彼の淋しい心が、一日たりとも女性との純愛なしには生きられない心情のあせりから、是が非でもY嬢なきあとは文子さんでなければならないのだとひたすら願う気持で文子さんに少しでも疑念を抱かせず、Y嬢との過去のことを黙殺しておきたい為ではないだろうか？

「貰いたい理由は、たった一つあるきりです。さうして、その理由は僕は、文ちゃんが好きだと云ふ事です。勿論昔から好きでした。今でも好きです。その外に何も理由はありません。僕は世間の人のやうに、結婚と云ふ事と、いろいろな生活上の便宜と云事ふとを一つにして考へる事の出来ない人間です。ですから、これだけの理由で、兄さんに、文ちゃんを頂けるなら頂きたいと云ひました。さうして、それは頂くとも頂かないとも、文ちゃんの考へ一つで、きまらなければならないと云ひました。

僕は、今でも、兄さんに話した時の通りな心もちでゐます。世間では、僕の考へ方を何と笑ってもかまひません。世間の人間は、いい加減な見合ひと、いい加減な身もとしらべとで、造作なく結婚してゐます。僕にはそれが出来ません。その出来ない点で、世間より、僕の方が、余程高等だとうぬぼれてゐます。」

と、勿論、単なる見合い結婚を否定し、純粋な愛情の合意によってのみ結婚はすべきものだと、得意になっていっているのがよく分る。と同時に「勿論、昔から好きでした」と正面から再び強調しているところが、何としても文子さんを得たいと願う気持がうかがわえる。

更に、

「兎に角、僕が文ちゃんを貰ふか貰はないかと云ふ事は全く文ちゃん次第で、きまる事なのです。僕から云へば、勿論、承知して頂きたいのには違いありません。しかし、一分一厘でも、文ちゃんの考へを、無理に、動かすやうな事があっては、文ちゃん自身にも、文ちゃんのお母さまや兄さんにも、僕がすまない事になります。ですから、文ちゃんは、全く自由に、自分でどっちともきめなければいけません。万一、後悔するような事があっては、大へんです。」と、若し万一ことわられたら大変なのに、いいきかせるように冷静をよそうて書いているところに、スタイリスト芥川の面目がにじみ出ている。更に、「僕のやってゐる商売は、今の日本で、一番金にならない商売です。その上、僕自身も、碌に金はありません。ですから、生活の程度から云へば、何時までたっても知れたものです。それから、僕は、からだも、あたまもあまり上等に出来上ってゐません。（あたまの方は、それでも、まだ少しは自信があります。）

うちには、父、母、伯母と、としよりが三人ゐます。それでよければ来て下さい。

僕には、文ちゃん自身の口から、かざり気のない返事を聞きたいと思ってゐます。繰返して書きますが、理由は一つしかありません。僕は、文ちゃんが好きです。それだけでよければ、来て下さい。

この手紙は、人に見せても見せなくても、文ちゃんの自由です。

一の宮は、もう秋らしくなりました。木槿の花がしぼみかかったり、弘法麦の穂がこげ茶色になったりしてゐるのを見ると、心細い気がします。僕がここにゐる間に、書く暇と、書く気とがあったら、もう一度手紙を書いて下さい。「暇と気とがあったら」です。書かなくってもかまひません。が、書いて頂ければ、尚、うれしいだろうと思います。

これでやめます。皆さまによろしく」

芥川龍之介

自分を素直にさらけ出して、彼女にナイーブな純愛を求めようとする気持と、初恋の人とは違って、何よりも養父母のお気に入りの女性であるだけに、彼女との推移から、九分九厘この恋は結ぶであろう、という安心感から、彼本来の冷静な気持で書いているのがよくわかる。その後、若々しい情熱と、愛情に溢れた手紙が文子さん宛に沢山送られている。

その中で、

「つくろはずかざらず天然自然のままで正直に生きてゆく人間が人間としては一番上等な人間です。どんな時でもつけやきばはいけません。今のままの文ちゃんは×××××を十人一しょにしたよりも立派なものです。何時までもその通りでいらっしゃい、それだけで沢山です、それだけで誰よりもえらざんす、少くとも私には誰も外にくらべるものがありません。」

と書き、或いは、

「来年の今頃にはもう、うちが持てるでせう。尤も月給が六十円しかないんだから、ずゐぶん貧乏ですよ。それでやって行くのは、苦しいが、がまんして下さい。苦しい時は、二人で一しょに苦しみませう、その代り楽しい時は、二人で一しょに楽しみませう。そうすれば又、どうにかなる時が来ます。下等な成金になるより、上等な貧乏人になった方がいいでせう。そう思っていて下さい……。文ちゃんの外に僕の一しょにゐたいと思う人はありません。文ちゃんさへ、今の儘でゐてくれれば、今のやうに自然で、正直でゐてくれれば、さうして僕を愛してさへゐてくれれば、何だか気になるから、ききます。ほんとうに僕を愛してくれますか。

この手紙は、文ちゃん一人だけで見て下さい。人に見られると、気まりが悪いから」

と、楽しい結婚生活を思い、彼女に生まれたままの純心さを失わない理想の女性を見、いつまでも変らず自分を愛していてほしいとうったえている。イゴイズムのない愛を否定しながらも、如何にイゴイズムのない愛を熱望しなければいられなかった事だろう。

勿論、一宮からの求婚の手紙によって、この恋は実を結び、二年後の大正七年二月二日幸福な結婚にゴールインした訳である。

かように、彼は文壇に花々しくデビューしたし、一生を託すべき彼女へは求婚の手紙を書いたし、一昨年とは違って、一宮館での楽しい生活を、恩師夏目漱石宛に、

「先生

また、手紙を書きます。嘸、この頃の暑さに、我々の長い手紙をお読みになるのは、御迷惑だろうと思ひますが、これも我々のやうな門下生を持った因果と御あきらめ下さい。その代り、御返事の御心配には及びません。先生へ手紙を書くと云ふ事それ自身、我々の満足なのですから」と前置きして、

「今日は、我々のボヘミアンライフを、少し御紹介致します。今居る所は、この家で別荘と称する十畳と六畳と二間つゞきのかけはなれた一棟ですが、女中はじめ我々以外の人間は、飯の時と夜、床をとる時との外はやって来ません。これが先、我々の生活を自由ならしめる第一の条件です。我々は、この別荘の天地に、ねまきも、おきまきも一つで、ごろごろしてゐます。来る時に二人とも時計を忘れたので、何時に起きて何時に寝るのだか、我々にはさっぱりわかりません。何しろ太陽の高さで、略々見当をつけるんですから、非常に「帳裡日月長」と云ふ気がします。それから、甚、尾籠ですが、我々は滅多に後架へはいりません。大抵は前の庭のやうな所へ、してしまふのです。砂地ですぐしみこんでしまひますから、宿の者に発見される惧などは、万万ありません。第一、非常に手軽で、しかも爽快です。そふ云ふ始末ですから、部屋の中は、原稿用紙や本や絵の具や枕やはがきで、我ながらだらしがないと思う程、雑然紛然としています。私は本来久米などより余程きれいずきなのですが、この頃はすっかり悪風に感染してしまひました。夜はそのざふもつを、隅の方へつみかさねて、女中に床をとってもらひます。ふとんやかいまきは、可成清潔ですが、蚊帳は穴があるやうです。やうですと云ふのは、何時でも中に蚊がはいってゐるからで、実際穴があるかどうか、面倒くさいから、しらべて見た事はありません。その代り、獅嚙火鉢を一つ、蚊帳の中へ入れて、その中で盛に、蚊やり線香をいぶしました。久米の説によると、いぶしすぎた晩は、あくる日、頭が痛いさうです。ではよさうかと訊きますと、蚊に食はれるよりは、頭痛のする方がまだいゝと云ひます。そこで、やはり、毎晩、十本位づつ燃やす事にきめました。頭痛はしないまでも、いぶしすぎると、翌日、鼻の穴が少しいぶり臭いやうです。線香さへなくなれば、もういゝ加減にやめてもいいのですが、こてこて買って来たので、中々なくなりさうもありません。この頃は、それが少し苦になり出しました。」

と、かやぶきの離れ家で、久米と二人の何の屈託もなく、学生らしい茶目っ気ある、気まま放題な生活を楽しみ、外へ出

ては、

「海へは、雨さへふってゐなければ、何事を措いてもはひります。こゝは波の静かな時でも、外よりは余程大きなのがきますから、少し風がふくと、文字通りに、波濤洶湧します。一昨日、我々がはいってゐた時でした。私が少し泳いで、それから背の立つ所へ来て見ると、果してそこにねころんでゐました。が、いやな顔色をして、両手で面をおさへながら、うんうんと云ってゐるのです。久米は心臓の悪い男ですから、どうかしたのかと思って、心配しながら訊いて見ますと、実は、無理に遠くまで泳いで行った為にくたびれて帰れなくなった所へ、何度も頭から波をかぶったので、大へん苦しんださうです。さうして、あまり鹹い水をのんだので、もうこれは駄目かなと思ったのださうです。では又、何故そんなに遠くへ行ったのだと云ひますと、女でさえ泳いでゐるのに、男が泳げなくちゃ外聞がわるいと思って、奮発したのだと云ふ事でした。つまらない見えをしたものです。事によると、この女なるものが、尋常一様の女ではなくって、久米のほれてゐる女だったかもしれません。女と云へば、きれいな女は一人もいませんが、黒の海水着に、赤や緑の頭巾をかぶった女の子が、水につかってゐるのはきれいです。彼等は、全身が歓喜のやうに、躍ったり、跳ねたりしてゐます。さうして、蟹が一つ這ってゐても、面白そうにころがって笑ひます。浜菊のさいてゐる砂丘と海とを背景にして、彼等の一人を、ワットマンへ画かうと云ふ計画があるんですが、まだ着手しません。」

灼けつくような太陽の下、広い砂丘と海とを無台に、若さに充ち充ちた女性と、或いは、ざぶんと来る白波に、或いはきらきら光る浜砂に、青春を思い切り投げ出している楽しい様が浮んで来る。そして、又静かに砂丘の影に咲く黄色い浜菊に、或は、松林の中の畑にうす紫に咲く茄子の花に、遠く東京にいる求婚の人文子さんの面影を目の前に彷彿させて、

さかり来て人思うわれぞ砂山の　黄菊浜菊さはなさきそね

ほのかなるひとはな茄子かぎよりて　人は遠しと思ひけるかも

と、歌うことを忘れない純情掬すべき彼を発見する。

又、九月三日、田端の自宅から友人浅野三千三宛に、

「僕は昨日まで一の宮の宿屋でぶらぶら本をよんだり原稿を書いたり海へはいったりしてくらしてゐました。そのあひまには画をかいたり俳句を作ったりしました。さうして本職の仕事よりはさう云ふ事に余程得意になれるのが愉快でした。「砂

遠し穂蓼の上に海の雲」と云ふのはその時の句の一つです。序にもう一つ御披露すると「枯るる菊のにほひも砂に蒸す日かな」と云ふのがあります。菊と云ふのは浜菊です。枯るる浜菊とやるとあまり前半が新しくなりすぎるので、属性不明の菊で御免を蒙ってしまったのです。兎に角そんな事をして彼是半月以上ゐました。かへって見ると東京の空気が埃くさく煤煙くさいのに驚きます。所謂塵霧の気があるのですね。この頃では時々もう少し向ふにゐればよかったと思います。」

と、楽しかった一の宮の生活に未練を残しながら、静かに思い浮べている。

「周囲は醜い、自己も醜い、そしてそれを目のあたりに見て生きるのは苦しい、しかも人はそのままに生きる事を強いられる」という人の住む世界を離れて、この一の宮海岸という何にも汚されない、生まれたままの自然の環境の中で、青い空と、青い海と、青い松林と、広々とした奇麗な砂浜と、松林の中に離れている別荘とを舞台として、思いのままの明け暮れに、束の間でも彼の住む理想の生活を見い出したのではなかろうか。人生に対して、余りにも弱々しい、神経過敏な彼には、このような生活環境以外には、彼の安住するところが無いような気がしてならない。しかし、この屈託のなさそうな生活の中にも、彼の心の中に人生の哀感が何時しか、しのびより、夕べの海に向えば、

すべしらになげく心か夕白む　、波の穂がくり千鳥とぶ見ゆ

と、歌い

生活の糧に蛤を取っている素朴な女性に眼をとめて

珠ひろう海女のくびすによる水の　水明りすとかなしきものか

寄せる波にすけて見える足の色にまで、繊細な哀感をこめている。最も楽しい生活の中にも、彼の心の中には、常に宿命的な人生の寂寥感がつきまとっているような気がしてならない。

7

かように、彼芥川にとって、一の宮は初恋の人、Yという女性との悲恋の苦悩を初めて親友に打ち明けたところであり、彼の良き妻となった文子さんへ初めて求婚の手紙を書いたところであることを思えば、まさに忘れ難き思い出の場所であろう。それを裏書きするように、堀内の誘いで初めて一の宮に来た年より十一年経た大正十四年夏に、久米と二人で一宮館で過した時の思い出の断片を「微笑」と題した小品で、又、同年八月七日には同じ当時の思い出を「海のほとり」と題し、堀

内のことにも言及した小品的な短編小説を書いている。

「海のほとり」には、

「……雨はまだ降りつづけてゐた。僕等は午飯をすませた後、敷島を何本も灰にしながら、東京の友だちの噂などした。僕等のゐるのは何もない庭へ葭簀の日除けを差しかけた六畳二間の離れだった。庭には何もないと言っても、この海辺に多い弘法麦だけは疎うに砂の上に穂を垂れてゐた。この穂は僕等の来た時にはまだすっかり出揃はなかった。出てゐるのも大抵はまっ青だった。が、今はいつの間にかどの穂も同じやうに狐色に変り、穂先ごとに滴をやどしてゐた。

「さあ、仕事でもするかな。」

Mは長ながと寝ころんだまま、糊の強い宿の湯帷子の袖に近眼鏡の玉を拭ってゐた。仕事と言ふのは僕等の雑誌へ毎月何か書かねばならぬ、その創作のことを指すのだった。」

という書き出しであるが、Mというのは勿論久米正雄のことであり、六畳二間というのは、大正五年八月十七日より九月二日迄楽しく久米と過した一の宮館の離れ家である十畳と六畳の二間のことであり、文子さんに初めて求婚の手紙を書いたあとのほっとした晩夏の一の宮海岸のある日が追憶的に若々しく画かれている。

「海には僕等の来た頃は勿論、きのふさへまだ七、八人の男女は浪乗りなどを試みていた。しかしけうは人かげもなければ、海水浴区域を指定する赤旗も立ってゐなかった。唯広びろとつづいた渚に浪の倒れてゐるばかりだった。葭簀囲いの着もの脱ぎ場にも、――そこには茶色の犬が一匹、細かい羽虫の群れを追いかけてゐた。

渚はどこも見渡す限り、打ち上げられた海草の外は白じらと日の光に煙ってゐた。そこには唯雲の影の時々大走りに通るだけだった。僕等は敷島を啣へながら、暫くは黙ってかう言ふ渚に寄せて来る浪を眺めてゐた。

「君は教師の口はきまったのか？」

Mはいきなりとこんなことを尋ねた。

「まだだ。君は？」

「僕か？　僕は……」

Mの何か言ひかけた時、僕等は急に笑ひ声やけたたましい足音に驚かされた。これは海水着に海水帽をかぶった同年輩の二人の少女だった。彼等は殆ど傍若無人に僕等の側を通り抜けながら、まっすぐに渚へ走って行った。

僕等はその後姿を、――二人は真紅の海水着を着、もう一人は丁度虎のやうに黒と黄とだんだらの海水着を着た、軽快な後姿を見送ると、いつか言い合せたやうに微笑してゐた。

「彼女たちもまだ帰らなかったんだな。」

Mの声は常談らしい中にも多少の感慨を託してゐた。

「どうだ、もう一ぺんはひって来てやろう」

「あいつ一人ならばはひって来るがな。何しろ「ジンゲジ」と言ふ諢名をつけてゐた。「ジンゲジ」とは彼女の顔だちの肉感的(ジンリッヒ)なことを意味するのだった。僕等は二人ともこの少女にどうも好意を持ち悪かった。もう一人の少女にも、――Mはもう一人の少女には比較的興味を感じてゐた。のみならず「君は「ジンゲジ」にしろよ。僕はあいつにするから」などと都合の好いことを主張してゐた。

「そこを彼女の為にはひって来いよ。」

「ふん、犠牲的精神を発揮してか?――だがあいつらも見られてゐることはちゃんと意識してゐるんだからな。」

「意識してゐたって好いぢゃないか。」

「いや、どうも少し癪だね。」

彼等は手をつないだまま、もう浅瀬へはひってゐた。浪は彼等の足もとへ絶えず水吹(しぶ)きを打ち上げに来た。彼等は濡れるのを惧れるやうにその度にきっと飛び上った。かう言ふ彼等の戯れはこの寂しい残暑の渚と不調和に感ずるほど花やかに見えた。それは実際人間よりも蝶の美しさに近いものだった。僕等は風の運んで来る彼等の笑ひ声を聞きながら、暫く又渚から遠ざかる彼等の姿を眺めてゐた。

「感心に中々勇敢だな。」

「まだ背は立ってゐる。」

「もう――いや、まだ立ってゐるな。」

彼等はとうに手をつながず、別々に沖へ進んでゐた。と思ふと乳ほどの水の中に立ち、もう一人の少女を招きながら、何か甲高い声をあげた。あの顔は大きい海水帽のうちに遠目にも活き活きと笑ってゐた。……」

この二人の少女の影像については、大正五年八月二十八日付夏目漱石宛の手紙の中に「女といへば、きれいな女は一人もゐませんが、黒の海水着に、赤や緑の頭巾をかぶった女の子が水につかってゐるのはきれいです。……」

と、いうのに符合する。一の宮海岸の広々した寂しい残暑の渚を舞台にして二人の少女の躍動する様を人間よりも蝶の美しさに近いものだった。と懐古的に書いている芥川の眼には、忘れ得ぬ第一の恋人であるYという女性、第二の恋人である文ちゃんの若く美しい二人の影像を懐しく生々と思い浮べていたことであろう。一の宮から直接又は間接に書き綴った恋情あふるる手紙や歌と共に、

この小説の最後にHという堀内利器(当時京大理科研究室)やNさんという一の宮館の若主人(現主人の祖父に当る人)に言及して、

「……日の暮も秋のやうに涼しかった。僕等は晩飯をすませた後、この町に帰省中のHと言ふ友だちやNさんと言ふ宿の若主人ともう一度浜へ出かけて行った。

と、いう書き出しで、四人が浜に生えている植物や、虎魚(おこぜ)に刺された東京の株ヤの話、ながらみ取りが澪におぼれて死亡し、その幽霊が出るといううわさだったが、ある男が幽霊の生態をつきとめたら、そのながらみ取りと夫婦約束したこの町の達磨茶ヤの女が毎晩十二時になると、その人の墓前にぼんやり立っていたという、海辺にふさわしい話をしながら人気のない渚を歩いている様を画いている。初めて一の宮に彼をさそった堀内や久米と楽しく過した一の宮館の若主人は芥川にとって忘れ得ぬ人々だったにちがいない。

「微笑」と題した小品には久米とのことを、

「僕が大学を卒業した年の夏、久米正雄と一緒に上総の一ノ宮の海岸に遊びに行った。それは遊びに行ったといっても、本を読んだり、原稿を書いたりしてゐたには違ひないが、まあ一日の大部分は海にはひったり、散歩したり暮してゐた。

或暮方、僕等は一ノ宮の町へ散歩に行き、もう人の顔も見えない頃、ぶらぶら宿の方へ帰って来た。道は宿へ辿り着くためには、弘法麦や防風林の生えた砂山を一つ越えなければならぬ。丁度、その砂山の上に来た時、久米は何か叫ぶが早いか一目散に砂山を駆け降りて行った。僕はどうしたのだかわからなかったが、兎に角、何か駆けなければならぬ必要があるのだらうと思ったから、矢張、その後から駆け出すことにした。それは人目のない砂山の上に、たった独り取残されるのは薄気味悪いといふことも手伝ってゐるのに違ひない。しかし、久米は何といっても中学の野球の選手などをしたことのある男で